

編集後記

今月号の特集は脊髄損傷である。過去、しばしば、このテーマがとりあげられているが今回は、リハビリテーション専門医が、十分な知識を持つ必要がある、脊損に伴う直接生命維持に関係する諸問題や、健康管理上問題となる事項をとり上げた。

高位脊損者の呼吸管理の問題を吉村氏他に、最近、高位脊損者の自律神経過反射に起因する脳出血例の報告が散見されるが、この問題を中心としたものを岩坪氏他に、脊損者に比較的合併する頻度の高い消化器障害については山本氏他に解説して頂いた。いずれも、臨床に直結した有益な論文を執筆して頂き感謝にたえない。浅山氏他の第1回大分国際車椅子マラソン大会を通じてみた脊損者の体力についての論文と、座談会は、わが国のリハビリテーションの発展をうかがわせる内容であり、座談会に参加して頂いた経験豊富な先生方は指針に富んだ、教科書にはない興味あるお話をして頂いた。

研究と報告には2編を掲載することができた。伊藤氏他による頸髄損傷の上肢機能再建術についての論文は、講座の欄での、福田氏

の中中枢神経障害に対する上肢機能再建術についての解説にもあるように、目的、適応を厳格に加えれば、機能レベルのアップをはかれる一手段ともなりうるものである。基礎的な知識として持つべき課題であり、臨床に参考になる論文である。また、二木氏の論文は、氏の脳卒中に関する日常の研究の集大成ともいうべき力作である。氏のリハビリテーション専門医としての、今後のますますの活躍と研究の発展を期待したい。

間もなく、名古屋市にて、日本リハビリテーション医学会が開催される。回を重ね、20回目を迎える。人間のライフサイクルでいえば成人に達したことになる。これを期して、さらに、あらゆる面に対して躍進をめざし、発展、充実をはからなければならないと、身の引き締まる思いがする。

終わりに、わが国のリハビリテーションの発展に、本誌が果たした功績は多大なものがあったと感じているのは私のみではなからう。“総合リハビリテーション”が今まで以上に愛読され、活用されんことを望んでやまない。(緒方 甫)

次号予告(第11巻 第7号)

特集 専門医と認定医

日本リハビリテーション医学会における専門医・

認定医制度……………帝京大 岩 倉 博 光
日本の各科専門医制度とリハ科専門医制度との比較…慶大 石 田 暉・他
昭和56年度選考について

(1) 専門医……………七沢病院 安 藤 徳 彦

(2) 認定医……………産業医大 緒 方 甫

専門医に認定されて……………伊藤利之・岡本五十雄・森田能子・吉村 理

認定医に認定されて……………古賀良平・鈴木恒彦・吉永繁彦・渡辺英夫

卒後教育と研修システム……………川崎医大 明 石 謙

“リウマチ”とリハビリテーション……………横市大・整形外科 腰 野 富 久

巻頭言

研究と報告

足部変形と半側空間失認を合併する脳卒中

片麻痺に対する手術療法の意義……………東京医歯大 山本晴康・他

床反力による片麻痺歩行の分析：波形の

パターン分類について……………中伊豆リハセンター 窪田俊夫・他

脳卒中患者の障害の構造の研究

(第2報) 機能障害の構造および機能障害・

年齢と能力障害との関係の研究……………代々木病院 二 木 立

講 座

CT-7 胸部のCT……………東大・放射線科 大友 邦・他

上肢の機能解剖(4)

リハ医に必要な知識としての上肢の機能再建術

② 末梢、関節部分……………熊本労災 堀 尾 慎 彌

一頁講座

スプリント(7) 頸髄損傷のスプリント①……………九州労災 吉 村 理

編集顧問

天 児 民 和
大 島 良 雄
小 池 文 英
杉 山 尚
砂 原 茂 一
津 山 直 一
水野 祥太郎
土 屋 弘 吉

編集委員

明 石 謙
上 田 敏
緒 方 甫
大 井 淑 雄
大 川 嗣 雄
千 野 直 一
横 山 巖

編集同人

赤 津 隆
今 田 拓
今 村 哲 夫
江口 壽榮夫
小 川 孟
荻 島 秀 男
加倉井 周一
賀 集 竹 子
河 邨 文 一 郎
小 島 蓉 子
五 味 重 春
斉 藤 正 也
笹 沼 澄 子
澤 村 誠 志
高 田 玲 子
高 橋 勇
武 智 秀 夫
土 屋 和 夫
永 井 昌 夫
中 村 隆 一
野 島 元 雄
野 村 欽
橋 倉 一 裕
長谷川 恒雄
林 玉 子
福 井 園 彦
松 村 秩
三 島 博 信
矢 谷 令 子
渡 辺 英 夫
(五十音順)

(細田, 山田)